

21世紀を拓く

知の創造者たち

伊藤忠商事の完全子会社として5月に設立された伊藤忠鉱物資源開発。それまで本社内にあった金属資源技術・開発室を分離独立し別会社化することで、機動力ある金属資源の探鉱・開発を図る方針だ。先端技術に欠かさないレアメタルなどの権利獲得も含め、与えられたミッションは重い。

— 設立の経緯と業務内容を教えてください

近藤 実質的なスタートは6月から。まだ新鮮な雰囲気が出ています。17人の少数精鋭のため兼務者が多く、一人が抱える守備範囲が広いという状況ですが、それでも早く成果を出していきたいと業務に対して全員が意欲的に取り組んでいます。数年前までの伊藤忠商事の金属部門は鉄、石炭、アルミなどが中心で、銅、亜鉛などのベースメタルやレアメタル分野では権益を持っていませんでした。そこで2008年にそれらの権益への比重を高めるため、専門家を集めて金属資源技術・開発室を設置。探鉱・開発と

伊藤忠商事・伊藤忠鉱物資源開発

金属分野の探鉱、開発担う専門家集団

ともに他部門の鉱物資源開発を技術支援する業務を続けてきました。さらに活動領域を拡大するためには、より動きやすい体制のほうが効率的との考えから独立したわけです。今後も、より有望な鉱物資源の上流開発を手掛けていきます。私自身もプレーイングマネージャーとして世界中の現場を飛び回るつもりです。

上出 探鉱・開発に関わるには、どうしても専門知識と豊富な経験が必要です。巨額の投資案件になるので、鉱山の良し悪しを判断できる専門家集団でなければ、運営できません。私は金属関連一筋で現在まできましたが、技術的な側面以外に経営のアシスト、他部門との協業サポートなど業務は多岐にわたります。将来を展望したときに今何が重要かといえば、やはり人です。現在は、鉱山会社などで経験を積まれたベテランの専門家たちに支えられる面が大きいのですが、やはり、次の世代を担う若者たちを育て、質量ともに誇れる専門家集団になることを目標にしています。グローバルに活躍する、世界に通用するビジネス展開

- ▷こんどう・さとし 伊藤忠鉱物資源開発 代表取締役社長
- ▷うえて・かついち 同 副社長・経営企画部長兼技術・開発部長
- ▷あさだ・ともつね 同 技術・開発部長代行
- ▷ほしの・ゆうじ 同 技術・開発部兼財務・経理部

をしていきます。

—これまでの経歴と資源開発への思いなどを聞かせてください

浅田 入社してから長くアルミに携わってきましたが、2年前にレアアースを手掛けたのをきっかけに幅を広げてきました。昨年は亜鉛に取り組み、今年から銅の開発案件にも携わっています。アルミのときはオーストラリア、ブラジルなど、最近では銅、亜鉛でカナダと現場を回る喜びは大きいですね。また鉱山側との交渉なども、多くの現場を踏み経験をつけることで、相手のニーズなどを把握できるようになってきました。まだまだ、新しいことをやりたいという気持ちを強く持っています。

星野 入社は2003年です。その後、金

属資源技術・開発室に配属になり5年間、しっかりと鍛えられてきました。もともと、大学院まで資源の勉強をしていましたので、この知識を生かせる仕事につきたかった。それが商社になるとは、学生時代当初は思いませんでした。とにかく資源開発の仕事がしたくて夢見ていたので、希望がかなったことが喜びであり、同時に私のモチベーションになっています。業務の流れは書類で判断し、現場を視察、先方との交渉、契約という流れをベテランの専門家の指導を得ながら進めていく。これほどダイナミックで魅力的な仕事は他にはありません。プロジェクトマネージャーとして任されるのも責任とともにやりがいを感じます。



近藤 敏さん
新たな開発実現へ



上出 克一さん
国、産業界にも貢献



浅田 知恒さん
世界に通用のプロ



星野 裕司さん
理論備えた肌感覚

—金属資源の開発は産業界にとって重要な役割を担っています。新会社が今後成長するためには、何が重要になると思いますか

近藤 資源開発のためには人材開発が欠かせません。先ほども触れられましたが、人をどのように育てていくかが大事なカギです。基本的には「商社がわかる技術者であり技術がわかる商社マン」を育てていくことだと考えています。資源開発は特殊な世界ですので、育成には時間がかかります。昔はメジャー相手ですから投資判断に重きが置かれていましたが、今は、世界で1000社を超えるジュニアも相手にしなければなりません。それだけに開発リスクも大きく専門知識と経験をより多く積む必要があります。

上出 商社にとって技術はメジャーやメーカーに頼るのが一般的でした。ジョイントで事業する場合も商社側は経営面の役割を担ってきました。ところが状況が変わりメジャーやメーカーが独自で開発着手し、商社の役割も変わってきた。

自ら動き、目と足で確かめて投資をするスタイルです。われわれが商社のビジネスフィールドを広げていくという実感がありません。現在の課題は、人材の年齢層に開きがあることです。ベテランと若手の中間層が極端に少ない。早く若手を育てたいと思っています。

浅田 ベースメタルでは、銅、亜鉛など生産段階の案件を増やしたいですね。その延長で将来独自で鉱山経営を行う実力を備えた会社を目指したい。そのためにもこれから相当にノウハウを積み上げていきたいと思っています。

星野 資源開発に携わる人は、知的肉体労働者です。商社に入ってヘルメットと作業着、腰にハンマーを下けている専門集団の姿は考えられないかもしれません。その雄姿にあこがれてくれる人が出てくるようアピールが必要かもしれません。また、開発のパートナーとなる人たちと、どのように一体感をつくり出していけばよいのか、というのは課題だと思っています。

—将来の夢、展望など聞かせてください

近藤 鉱物資源は、今後も堅調な需要が見込まれています。新会社はベースメタル、レアメタルなどの資源権益の拡充と収益の拡大を目指すための戦力として、着実に迅速な対応が求められています。しっかりと使命を果たすよう探鉱・開発案件に取り組みたい。このほど発表しましたが、南アフリカ共和国でのプラチナ、パラジウムなど白金族金属の探鉱・開発事業への参画など、新たな開発実現に向けた展開を全力で推進していきたいですね。プラチナは自動車の排ガス浄化のための触媒に使用され、需要は増えていくとみられています。産業界に必要な資源を開発することは、日本の国際競争力の維持という面からも重要です。責任の重さを感じるとともに、挑戦する意欲がこみ上げてきます。

上出 資源開発は長期的なビジネスですので、理解を得るのに難しい面があります。投資が大きく、利益はかなり先に

なるからです。ただ、昔の投資が必ず生きてくる。とくに資源のない日本には、必要不可欠な取り組みです。有望な探鉱を進め国、産業界に貢献できる会社にしていきたい。

浅田 資源開発と簡単に言っても、地質、探査に始まり、採掘、選鉱などの生産プロセス、各国関係法、インフラ、環境、地域住民のことなど求められる知識は幅広く、生涯勉強になるのではないのでしょうか。やはりプロでないとい仕事はできませんので、より多くの現場を歩いて世界に通用するレベルを目指したい。少しずつ積み上げていきます。

星野 厳しくも優しく叱咤激励をうけています。厳しさは優しさのため、優しいために厳しい、という先輩たちの流れを、自分は受け継いでいきたい。現場に行き、石を叩きながら覚えていくのは職人のような感じですが、理論を備えた肌感覚も大事。まずはプロジェクトを仕上げていくことに全力を尽くします。

伊藤忠鉱物資源開発

- ◇本社—東京都港区北青山2-5-1 伊藤忠商事東京本社内
- ◇社長—近藤敏氏
- ◇設立—2011年5月、伊藤忠商事100%出資
- ◇事業内容—金属資源分野での探鉱・開発

ベースメタルとレアメタル ベースメタルは埋蔵量・産出量が多い鉄・銅・亜鉛・アルミニウムなど。これに対し産出量が少ないモリブデン・クロム・コバルト・パラジウム・プラチナ(白金)などをレアメタルと呼んでいる。